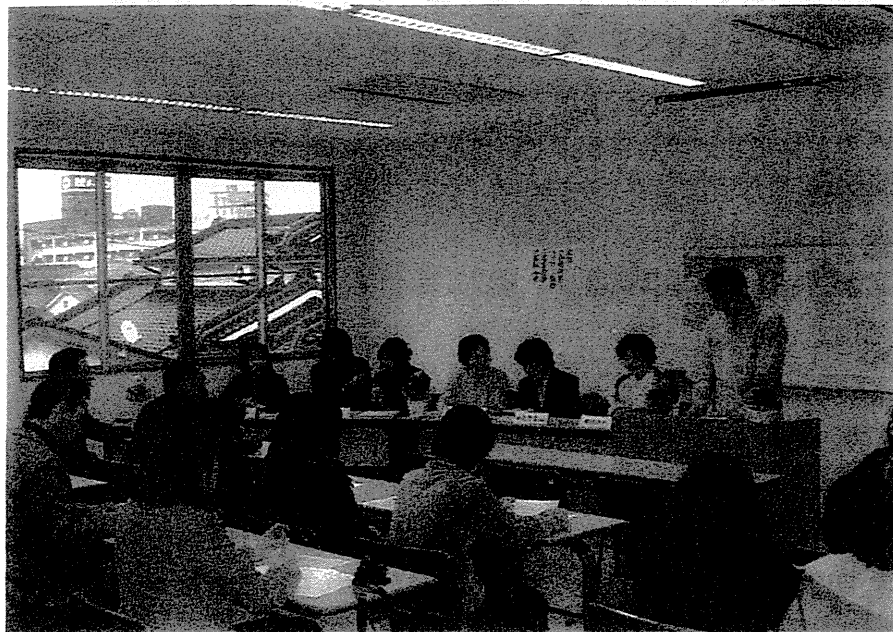


◆ 報告会を終えて ◆



報告会会場

ツアーに参加した5名の方達が、それぞれの思いを発表しました。初めていらしたかたも、スライドや地図などで解かりやすかったと思います。各自の内容を次ページに掲載致しました。

特別来賓としての
チャンタノン・マノダム氏(ラオス国保健局官房長官)

日本で、このような形で援助が続けられている事に大変感動され「日本の皆様の御支援を大変感謝いたします。」と述べられました。

ラオスの人々の暮らしぶりや環境なども話されました。ラオスでは道行く人のために、家の外に水がめを用意してある。又、知らない人にも『ごはん食べた』とあいさつし、食べていなければ食物を分けるそうです。

当日は、朝8時から川内小学校で学校保健について視察され、子供達と給食を食べられ、又、市長訪問、病院視察などお忙しいたった2日間の合間に来ていただきました。その後東京で、厚生労働省や国際医療センターなど視察され、計約1ヶ月間滞在されました。



ラオス視察旅行報告

宇田川国男（看護師）

4年振り2度目のラオス。何か変化があるのかと思って降り立ったラオス。はっきり言って良くも、悪くも何も変わってないように見えた。不思議な感情である。

しかし、じゃっどの活動は、現地スタッフお二人の日頃の活動、他の機関との連携により問題点、課題を明らかにし解決策を見出して成果を挙げていました。

- ①自転車ポンプによる井戸の設置
- ②トイレの設置及び衛生指導（石鹼の設置）
- ③教師への健康指導、セミナーの実施 郡病院の医師を含めて行う
- ④寄生虫（回虫対策）等

その他の細かい事まで浸透しているのがわかり、じゃっどの活動がラオスでは、なくてはならない位置を確立していました。皆さんの日頃の努力に敬意を改めて表します。

しかし現地のラオスの人々が何をしているのか？具体的に見えてこないのが、やや心配です。けっして施しを待っているだけの国民ではないと思うので、自立思考を育てていく事も必要だと感じました。自分たちの国を自分たちで築く人作りが求められていると思います。

ラオスは、何でこんなに時間がゆっくりなんだろう？日本は、忙しすぎて本来の仕事の意味を失っている面もあります。看護もそうです。患者中心の医療・看護と言われても、今の状況の中で埋没しそうです。そんな国になってほしくないと身勝手に思ってます。現地で働く、青年、壮年、熟年の皆さんの活動を日本で支えて行き、一人でも多くの方にラオスを知って頂くように宣伝活動を勧めたいと思います。

日程調整や現地でいろいろ心配りをして頂いたお二人と事務局の宮脇さんそしてなんといっても帖佐先生に感謝をいたします。何時かラオスか何処かで活躍したいと密かに思っている自分です。

ラオス視察ツアーに参加して

堀内恵子（看護師）

私が国際医療に関心を持ったのは1年ほど前でした。だからといって特別に自分で何か調べたり、勉強したりという事はせず過ごしていました。今回、知人を通してJADDOを知り、こんな良い機会はないだろう、と思い何もわからないまま参加させて頂きました。ラオスに着いたのは夜だったのですが、上空から見るラオス、こんなにも光がない国に来たのは、私にとって初めてで驚きました。驚きといえば日々、毎日が新鮮でした。小学校や病院、ゴミ処理場など視察し、本当にこれからの国なんだと実感しました。小学校は、壁もなくトタンの屋根では雨季の時、授業にならないだろうなと思い、病院では、なんで昨日生まれた子が外にいるの？妊婦になったら破傷風菌のワクチンを打つことになっている、ゴミ処理場ではテントを張って人が住んでいる、などなど驚きが一杯でした。TVな

どで見るボランティア活動しか私の中ではイメージがありませんでした。物資を提供するだけなら簡単なことで、それらを活用する必要性や活用の方法を教えていく事の、人を育てていく事の大変さを感じました。その国の習慣や考え方などがある中でボランティアをしていく大変さや難しさを少し理解し、肌で感じる事ができた旅でした。三日半の短い間でしたが、本当に色々見る事ができ、現地では、吉田さん、藤島さんに大変お世話になり感謝してます。今、自分にできることは何かを考え身近なところから少しずつ自分の知識、技術を活かしていければ、と思ってます。

ラオス

神崎絢子（高校生）

この旅で感じた事を書けと言われても、正直書けない。正確には、上手く言葉に表せない。この旅で私が得たものは、凄く大きかったように思うけど、なんか漠然としていて私の知っている言葉ではとても現せない。そんな不思議な旅。

私がラオスに行きたいと思った理由、それは単に思いつきでした。

高校生である今、自分の時間を自由に使う事が出来、これから社会に出て行くにあたって少しでも多くの情報を持っていたいと思ったからです。”私の知らない世界はどんなふうになっていて、人々はどんな生活を送っているのか”

興味ばかりが先走り、海外ボランティアとは名ばかりのお気楽な旅行のつもりでした。

ラオスに行き、驚きました。

首都と呼ばれる場所なのに道路を悠々と歩く動物達。キレイな建物の代わりに沢山の木々。道は整備されていないのでガタガタ揺れ、赤土のせいで道路沿いの植物の葉の色は変わり果てている。

とても一国の首都とは言えない様子に、最初は戸惑いさえ覚えました。

でも、実際に町を歩いてみて、この国の良さを知る事が出来ました。

日本じゃとても感じる事の出来ないゆったりした時間、あったかい空気。

何故会員の方々がこの国のために頑張るのが解かる様な気がしました。

始めに訪れたのは病院。

医療関係者でも何でもない私には設備などの説明はさっぱり解からなかったのです。

だけど待合室で心配そうにしている母親の表情と、点滴をつけたまま歩いている女の子の表情はやっぱり何処でも同じで、忘れられません。

廊下で数人が輪になって、ご飯食べてるのには驚きました。入院患者さんの家族だったよ

うですが、料理をみなで囲い楽しそうにご飯を食べる。そんなところもこの国の魅力かもしれない。

入り口にはシーサーが佇んでいるその病院はとても印象的でした。

小学校もとても印象的に残っています。

今回何箇所もの学校を廻ったのですが、どれも共通する事は子供達が楽しそうに遊んでいる姿。

やっぱりこの光景もどこでも一緒なのだと知りました。

子供達と会って、学校長から小学校の事を聞いて、感じた事があります。

それは、時の流れ。

誰にでも同じように時間の流れがあって、私が知らなかっただけで、その人たちは確かに存在している。

私がこうしている間も、私の知らない誰かが生きていてそれぞれの歴史を刻んでいる。

知ってはいたのですが、深く考えた事はありませんでした。

でも、その事に気がついたとき、私の中の世界は広がったように思います。

上手く表現できないんですけど、"私の世界の中に他人の世界が組み込まれた" そんなカンジがしました。

この旅で援助の難しさを知りました。

援助する側がどんなに頑張っても、受ける側がそれを自分のものにしようとしなければ意味はない。

確かに、辛い時誰かに頼ったりするのは仕方が無いと思います。けれど、ずっと頼っているだけでは自分の為にならない。

それは援助ではなく、甘える要因を作るだけで邪魔になっているのではないかと考えます。唯自分の願望を言うのではなく、自分達では如何しようもない事を他人に頼るのが正しい姿ではないのでしょうか。

大切なのは努力。唯援助を受けるだけなのは他人の善意に甘えてるだけ。

それでは人は成長しないと思います。

世界は意外と広いということも知りました。

私が世界を感じる時というのは大抵テレビ、新聞、雑誌等。色々な機会があります。

でもそれは視覚だけで感じることはできません。

今回初めて外国に出て、視覚は勿論、聴覚、など全てで感じる事ができました。

私の知らない道、私の知らない言葉、私の知らない食べ物、私の知らない空気。

そして、全ての人が私を知らない顔で見る。

そんな世界が私の目の前にありました。

不思議な感覚がしました。知ってはいるつもりでしたが初めての体験でした。
いつもの自分は逆の立場だからなんとも思わなかったのだと思います。
その感覚はなんとも言えず新鮮で、何とも言えぬ孤独感に満ちていました。
でも、私はこんな世界の片隅で生きているのだと改めて知りました。

今回私が体験した事は普通じゃとても体験できない貴重なもの。絶対に忘れられません。
長かったようで短かった旅の間感じた、ほんの少しのラオス。
出会ったもの全てがラオスの魅力で、どれも私のいい旅の思い出になったと思います。
この経験が今後私の生活にどのように関わってくるかはまだ分かりません。
でも、いずれこの旅の意味を知り、生かせるときがくるように感じます。

じゃっどツアー報告

小幡 順子（栄養士）

3年ぶりに参加したじゃっどツアー、前回あまりにも印象が良い国だったので機会があったらまた訪れたいと思い再度の参加でした。3年ぶりの空港はお祭りで浮かれていた前回と違い、とても静かでした。3年でどんなに変ったのだろう、変らなかったのだろうと考えながら私たちのツアーは始まりました。

Nahai 小学校（児童数 約 100 名）

到着後まず訪れたのは市内から20分ほど行ったナーハイ小学校です。学校の回りは整備され教室の中もきれいに片付けられ、小さいながら花壇も整備されていて先生方の心に余裕を感じる学校です。今回初参加の皆さんは、教室をうろつく犬にまずビックリされていましたが、この国では学校内に動物がいるのは当たり前のこと。どうやら上座仏教の考えから「追い出す」なんて事はしないらしいです。

この小学校では1年学級に寄付した机椅子への寄贈者の氏名記入をしました。机に記名していく私たちを不安げに見ている子どもたちの目が印象的でした。

Hukua 小学校（児童数 約 130 名）

3年前のツアーで援助対象審査のために立ち寄った学校です。その時あまりの汚さと先生方の意欲のなさに呆れて「こんなところには援助なんかしたくない」と会長に叫んだほどひどい学校でした。

今回訪れてみると、前回のようにあちこちにゴミが落ちているという状況はなく、立派な図書室も活用している様子です。どうやら校長が代わったそうです。新校長が再度援助申請をしてきたので様子を見たところ改善が見られたので今回500ドルを寄付するために訪れました。このお金は学校の壁や床にコンクリートを塗るために使われます。

Hongke小学校

フークワ小学校の帰り道、森田さんが6年前に立ち寄った小学校を見てみたいということで急遽街中にあるこのホンケ小学校に立ち寄りました。約束もしていなかったのに校長先生がにこやかに迎えてくれ校内を案内してくださいました。小さな学校ですが、教室もトイレもきれいに清掃され、手作りの教育備品もそろい子どもたちも小奇麗な子が多かったです。

しかし、気になったのは校庭にびっしりはえた雑草。ボール遊びなどできないくらい背の高い雑草が生え、体育の授業なんでないのかしらと思う事でした。

プロジェクト対象校

1 Samket小学校（児童数 221名）

比較的歴史の浅い村サムケートにある小学校です。色々なところから移り住んできたいわゆる国内難民と言われる人たちの多い地域ということです。校長先生がまだ15歳位のときで教員養成コースに通いながら始めたそうです。女の校長先生がお寺で子どもたちを集めて15年ほど前に開設された学校です。

今回のプロジェクトで自転車ポンプ付トイレ寄付しました。校庭のほうから見ると、並んで建つ校舎よりトイレのほうがしっかりした作りでちょっと笑えます。

今回ツアー中に、会員のいる阿久根小学校とのビデオによる交流会を実施しました。日本より持参したラオスの子どもたちへのメッセージや日本の学校の様子などをまとめたビデオを見てもらい、最後に阿久根小学校から絵や習字などの作品、阿久根・加世田小学校の子どもたちからの文房具を寄付しました。（後日、絵や習字などの作品は教室に飾られたそうです）

日本の子どもたちからの質問で「どんな食べ物が好きですか」との問いに、まず返ってきたのは「お米」という答えでした。他には？と尋ねると「魚」との事。この国の食生活の現状を垣間見た気がしました。

そのせいかもしれませんが、体格のバラつきが目立つ学校でもありました。吉田さんによると就学期にはどの学校にもムラがあるということでした。金銭的余裕がないと学校へ行くことは難しい家庭もあるようです。

2 Nonkilek小学校（児童数 294名）

商人の多い地域にあるノンキック村の小学校です。現金収入のある人が多いので、早くから学校があったようです。お金があるせいか、隣にあるお寺は極彩色に塗られていました。

比較的都心近いので水道があったので水道によるトイレを寄付しました。

1年生のクラスを覗くと赤ちゃんを抱えたお母さん先生が教壇に立っていました。一方5

年生のクラスには高校生かなと思うほど若い男の先生が指導していました。女の先生が多いこの国でちょっと珍しく感じました。

金銭的余裕のある地域ですが、校内には犬、鶏、すぐ柵越しには牛とお世辞にも衛生環境は良くないようです。そして低学年は2クラスずつあるのに、最終学年の5年生は1クラスしかありません。1クラス分の子どもたちはどこへ行ったのでしょうか？

3 Nongken小学校 (児童数 209名)

ナムグヌ川を渡って出かけたノンケン小学校では5年生が並んで私たちを待っていてくれました。この学校には、自転車ポンプ付トイレを寄付しました。(学校裏に用水路があるが、乾期の農業用水のため雨期には用水路は閉めるのでトイレ用には使えなかった) 今回訪れた学校で一番ボロかった学校で、床も踏み固めてないホコリっぽい作りでした。

トイレの授与式を行っていたところ、学校の裏手で声がするので回ってみると低学年生が用水路で水浴びをしている最中でした。私に気づくと恥ずかしそうに着替えて、恥ずかしさを飛ばすように二人で肩を組み歌いながら帰っていく姿は微笑ましいものがありました。

4 Nathe小学校 (児童数 132名)

ビエンチャン市内から一番遠い対象校ナテ小学校へは市内から50分ほど赤土の道をほこりを上げながら通って出かけました。対象校では一番協力的かつ積極的な学校だそうで、今回寄付した自転車ポンプ付トイレを見ていた言葉の通じない隅田君と私に、ナテ村長が一生懸命感謝を伝え、村がすべき屋根設置が終わっていない事を詫げる姿が印象的でした。

そんな村長のいる村の学校は校庭も広く、校舎内もよく整頓されていました。机がとてもしっかりした作りだったので、聞くと保護者たちの手作りとの事。村全体で子どもたちのために頑張ろうという熱意が伝わってくる学校でした。

おまけの報告書

さすらいの食いしん坊 OBATA

前回のツアーでの食事の印象があまりに良かったので、帰ってからアジア方面の食生活をちょっと調べてみれば、今ブームのタイ料理のふるさとではありませんか。これは再度訪れて食べ損ねたアレもコレも食べてみなくては収まらない。と言う事で、やってきました実は3度目のラオス。やっぱり美味しいラオスです。

まず最初のお勧めは、ビエンチャンの高級ホテル「ラオブラザ」近くにある食堂のサンドイッチ。

フランスパンを軽く炭火で温めたところに切り目をいれ、注文の具を入れていくかなりボリュームのあるサンドイッチです。私は小母さん推薦のミックスを注文しました。パンの

内側片面にまずツナパテらしくものをベッタリ塗り、もう一方にはバターらしきものをこれまたベッタリ塗っておきます。サンドイッチの定番レタスときゅうり、トマトをはさんだらこれからがラオスタイルです。パパイヤのピクルスらしきもの、焼き豚、魚肉ソーセージみたいなもの、ひょっとしてハム(?)といったもののスライスを一枚ずついれ、その上からチリソースとナンプラーをふりかけ、仕上げに小葱とパクチーを少々。上からギュウと押さえたらワラ半紙で包んで輪ゴムで止めて出来上がり。このサンドイッチをホテルに持ち帰り(私たちが泊ったのはラオプラザ裏のビジネスホテルです)濃いラオコーヒーと一緒に頂けば、ラオスまで来た甲斐があるというもの。なお料金はフランスパン半分で25バーツ(約75円)でした。

次にお勧めはビエンチャン飛行場内にある3階ラウンジのランチビュフェ。代表的ラオ料理がずらり並んでいるバイキング方式のお店です。観光客が食べるような場所なのですが、実は地元ラオ人が利用する場所なのだそうです。ラオ人の選ぶ料理をみればどんな料理や食材が人気なのか一目瞭然の場所です。栄養士の私としましては、しばし食欲を抑えてマンウォッチングに勤しんだのでした。私の観察によると人気メニューは「蟹のカレー卵とじ」と「桜海老のような小エビをタレに生のまま漬けたもの」。蟹のほうはタイのものと比べ甘味が少ない感じ。小エビのほうはごめんなさい、寄生虫撲滅プロジェクトのNGO会員としては食べる勇気がありませんでした。勇気のある方はぜひチャレンジしてください。そして、感想を教えてください。

一番のご馳走は最終日の夜、現地スタッフの藤島さん吉田さんの家で行われたガーデンパーティでの食事でした。日頃じゃっどの活動でお世話になっている皆様を招待してのパーティで、二人の家の隣に住む大家さんに頼んでラオの代表的な家庭料理を幾種類も作っていただいたの食事会です。私の好きな「竹ごはん」やお祝いの席には欠かせない「ラープ」、「生春巻き」に「揚げ春巻き」と名物料理ばかりが並んだのでした。途中からでしたがその料理の作る過程を見れたのは職業上超ラッキーな事でした。ボーっと見ていたら大家の小母ちゃんにしっかり手伝われせられたけれど……。それはそれで、楽しい体験でした。

その食事会で印象に残った事はラオ人が「なまずの塩焼き」を見つめる熱い視線です。ビエンチャン大学工業学部教授(自転車ポンプ改良で大変お世話になっています)作成の「自動なまず焼き器」(!)に「なまず」が並べられ、香ばしい焼き魚の香りが立ち込め始めるとラオ人たちの目が爛々と輝き始めるのです! お味のほうは海の魚になれた私の舌にはちょっと癖のある白身の肉なのですが、これが地元の人には堪らないらしいのです。サムケート小学校の子どもたちが好きだと言っていた魚はなまずの事だったのかと考える事でした。

さらに奥深いと感じたのは「パパイヤサラダ」。普通ラオスのそれは砂糖が入らないのでタイのものより甘味が少ないのですが、今回初めて半分熟したパパイヤを使った果物の甘味のあるサラダでした。これがまたおいしくてパクパク食べていたら、隣の日本人席から「辛くって食べられない」の声が聞こえます。「こちらはそんなにないですよ」と言うと「こっちを食べてみてよ」と言うので、いつものようにたっぷりとして食べてみると・・・**ひょえっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!** これって人間の食べ物じゃないって位辛い。私の雄叫びを聞いた吉田さんが味見をして言うには「どうやらラオ人のテーブルに持って行く分を間違えてこちらに置いたようですね。換えてきましょう。」これほど辛い料理をケロリと食べるラオ人、恐るべしです。

その他には、顎関節症の私の顎が壊れるのではないかと言うほど（お年寄りの）鶏の照り焼きピンガイも頂きました。味はよろしかったのですが、次回ぜひ若い方を頂きたいと思います。

帰ってきて「地球の歩き方」を見るとまだ食べてないお勧め料理がある～。これはまた訪れるしかないではありませんか!!!!!! という事で理子さんまた機会があったら連れて行ってくださいね♡



オリジナルTシャツを着て記念写真。
向かって左は会員の古田宣稔氏、中央はラオスの先生たち、右は会員の藤島美由紀氏。（2003年2月古田氏ラオス訪問）

国内活動

- 3月19日 公益信託 今井記念海外協力基金助成金交付決定
30万円の助成金をいただけることになりました。
- 3月20日 川内市役所でラオス雑貨の販売をしました。
西谷さん・高橋さんに手伝っていただきました。
- 3月24日 九州電力生活共同組合からの寄付金伝達式
50万円の寄付金をいただけることになりました。

加世田小学校「総合的な学習の時間」の報告



2月26日、加世田市立加世田小学校6年生（児童数110名）を対象に帖佐会長が約50分講話をしました。はじめに、地雷を踏んで足を負傷し、病院にすぐに連れて行けず死んだラオスの少年の実話（モン族の民話を記録する活動をなさっている安井清子氏のつうしん誌に記載）を6年生の担当の先生に朗読していただきました。ほとんどの子供が熱心に聞き入り、中には涙を流しながら聞き入る子供たちがいきました。

次に、カットした写真の上半身を子供たちに想像させて先生に絵を描いてもらい、正解としてもう半分の写真をみせる活動をしました。（写真は、残りの絵の完成を試みる田島先生）例えば、下半身は銃を構えている人間の、上半身を完成させるのです。実際の完成図は、アフリカの女の子が銃を持って立っている姿です。帖佐会長の説明に子供たちの中からは「えーっ！」と、驚きの声があがりました。スカート姿の男性（ブータンの正装）や、いかにも怖そうなひげを生やしたパキスタン男性が乳飲み子を抱いている姿など、国によって異なる文化、風習を考えてもらいました。また、ものごとの一部だけを見て判断をくださことの危険性を知る、開発教育の一環でもありました。

最後に、ラオスの様子を、パネルや写真、そしてスライド（CDにおとしたもの）を、スクリーンでみました。のどかなラオスの風景、教室には犬がいたり、道路を牛や象が歩いている様子、日本の子供たちと同じように校庭で楽しそうに遊んでいる子供たちなど限られた時間ではありましたが帖佐会長が解説しながら紹介し、あっという間に時間が過ぎてしまいました。また、子供たちは事前にじゃっど視察ツアーのビデオ（小幡さんが、視察の学校の様子など編集したもの）を先生といっしょに見て予習をしていたそうです。

今回の講話を通してよりいっそうラオスの事を子供達なりに理解し、意識したのではないかと思います。3月15日の報告会に田島先生が子供達からの感想文を持ってきてくださいました。その中で、多くの子供達が、自分達で集めた鉛筆や募金（机、いす募金）がラオスで役立っている事、恵まれている自分達を改めて認識し、感謝すると共に、不平等への疑問、ボランティア活動に興味をもった事、など率直な感想が多くありました。ラオスの子供達がすごく明るく、楽しそうに暮らしており、幸せはみんなにあるんだな。今日のこのお話を、来年の6年生にも伝えていきたいという感想もありました。

加世田小学校の総合学習の取り組みの質の高さを感じました。じゃっどの活動にも「がんばってください」とエールをいただきました。

ご準備いただいた加世田小学校の職員の皆様にあたためてお礼申し上げます。（帖佐理子、宮脇美智子）

【事務局からのお知らせ】

Eメールアドレスが変わります！！

じゃっど事務局

メールアドレス ; asianoko@ml.satsuma.ne.jp (6月30日までは利用可)

から

メールアドレス ; jaddo@po2.synapse.ne.jp

に変わりました。会員の皆様ご確認をお願いします。

事務局：鹿児島県川内市神田町 11-20 若松記念病院内

会長 帖佐理子 事務担当 宮脇美智子

TEL・FAX 0996-27-0193

会員継続の平成 15 年度会費(平成 15 年 7 月 1 日～平成 16 年 6 月 30 日)納入については、次回じゃっど新聞(6 月号)でお知らせします。

新規会員の募集をしています

じゃっど

(アジアの子供たちを援助する会) JADDO

じゃっど：鹿児島弁で「そうだ。賛成。」の意味

今なお開発途上国では 2 億人以上の 5 歳未満の時が栄養不良の状態にあり、毎日 3 万人の子供たちが予防可能な病気で命を落としています。たとえ乳児期を生き抜いても、初等教育を受けられず、健康に発達してゆくことのできない子供たちが大勢います。

このような子供たちが健康に育ち、そして教育を受けられるように少しでもお手伝いしようという目的で生まれた会です。

活動対象 ラオス人民民主共和国 ビエンチャン市とその近郊小学校の児童・教師

活動目的 プライマリーヘルスケアの向上 (予防医学的保健衛生知識の普及)

現地活動名： 「小さなお医者さんプロジェクト」

会員状況 国内会員 235 名(2003 年 3 月現在)

国内活動 広報誌「じゃっど新聞」の発行

机、いす募金の募集

パネル展、各イベントへの参加

じゃっどツアー(現地視察)の実施

子供たちが元気に学校に行けるように、あなたもお手伝いくださいませんか？

年会費；2000 円

振込先；郵便振替 02050-2-4746

口座名 じゃっど

詳細は、事務局までお問い合わせください。

お詫び；3 月 15 日の報告会で配布しましたチラシの中に誤りがありましたので訂正致します。ラオス国保険局官房長官→ラオス国保健局官房長官でした。